

企業名： 三浦工業

レポート名： 三浦工業株式会社 統合報告書 2021

1. この会社が目指す姿が理解できるか

理解できる。将来性が十分とは言えないかもしれないが、自らの会社の目指すべき姿が、過去の数値との比較で現実的に描かれている。統合報告書には、達成すべき目標がSDGsに関連づけられていて、事業ごとに詳しく紹介されている。コロナウイルスや、地球環境など近年の経営環境の変化から将来を見据えて、コーポレート・ガバナンス体制の強化やサステナビリティへの対応などの方針がしっかりと立てられていると感じる。また、ステークホルダーとの関係性の強化も、図ろうとしていて、この会社が目指す姿は事細かく理解ができると考える。

2. この会社の競争優位性が理解できるか

十分に理解できる。「もし今、我々とこの会社との関わりが無くなったら」を考えた際、ボイラーを主に製造している企業のため、家庭などに大きな影響は出ないかもしれないが、ボイラー業界では高いシェア率を誇っているため、多くの公共施設などで影響が出て、間接的に我々にも不利益がもたらされるだろう。売上収益もコロナウイルスの影響を受けた2021年を除いて、1982年からおおむね右肩上がりであることも、この会社がいかに大きな影響力を持っているかを示している。また現在、大きな成長ドライバーである中国市場での事業展開に積極的に取り組んでいて、その戦略も詳細に組まれている。このように他企業との差別化も図ろうとしているため、競争優位性は業界内では十分であると考えられる。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

理解できる。上記の競争優位性に持続性があるかどうか、それをどのように持続させていくのか、が明確に示されているとまでは言えないが、こちらで判断するには十分な量の根拠は提示されていると感じた。海外でも多くの事業展開を行っているといったような競争優位性が今後も持続するかを考えると、これから他の企業がグローバル化に順応して同様の対応をした場合、三浦工業の優位性は薄れると考えられる。しかし、ボイラーなどの国内機器販売事業以外にも国内メンテナンス事業でも、十分とは言えないもののそれなりの利益を生み出しているといったような側面からみると、単一の事業に偏っている企業よりは、常に優位性はあるとも考えることができる。実際、統合報告書には、国内機器販売事業の中でもボイラー事業、アクア事業、食品機械事業、メディカル事業、新事業開発・熱事業、環境事業、船用事業、に分けられており、それぞれの強み、課題、機会、脅威が客観的に分析されているだけでなく、さらにその強みの源泉、今後の成長に向けた戦略・重点施策も書

かれていた。そのため、自らの会社の今後について丁寧に考えているように感じられ、比較的持続性はあると考える。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

達成できると思う。“大きな壁にぶつかってもネアカで挑戦し続ける積極的な心構えで、自ら考え、自ら行動できる人材を求めている”と統合報告書に書いてあり、個人的にはそれは目指すべき人間像だと感じている。また、ワーク・ライフバランスや、働き方改革などにも積極的に取り組んでおり、それぞれでおおむね成果をだしているといえる。このような環境下であれば自分自身の人的資本の価値向上を達成することができると思う。

5. 報告書にはどのような改善余地があるか

まず初めに、配置、色使いなどが工夫されていて、大変見やすい報告書だと感じた。しかし、下記の3点においては改善の余地があると感じた。1点目として、過去のデータがあまり記されておらず、今後の予測や目標の値が多用されている点である。過去の予測通りにいかなかった結果や伸び悩んだ期間の値も示すことで、これからの予測に透明性がでて、説得力も増すのではないだろうか。2点目として、事業についての説明が大部分を占めており、職場の環境などの説明が少ない点である。前者については、知りたいと感じている人は自分で調べることができるため、もう少し後者に重点を置いた方が見えざる資産について理解しやすくなり、内容の濃い統合報告書となるのではないか。3点目として、他の企業との比較がない点である。書かないのが普通なのかもしれないが、自社の良いところを際立たせ、課題点をわかりやすくするためには、比較があった方が良いのでは、と感じた。しかしながら、繰り返すようではあるが、とても見やすくわかりやすい統合報告書であると思う。